

家庭の社会経済的背景と児童の学力・学習意識— 国際数学・理科教育動向調査の保護者調査を用いた分析*

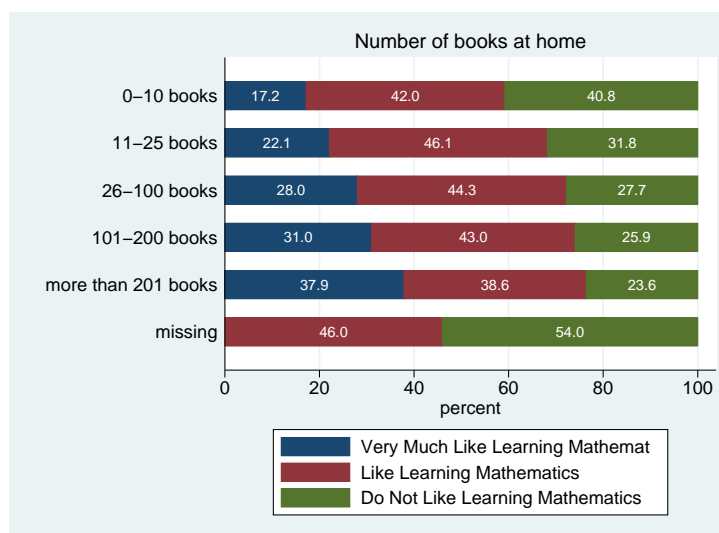
北條 雅一†

2017年7月8日

本稿では、家庭環境の違いによって具体的にどの程度の学力差が発生しているかを確認した。家庭環境の代理変数としては、家庭の蔵書数、保護者の最終学歴、就業形態、主たる職業に注目した。使用したデータは国際数学・理科教育動向調査の2015年調査、対象学年は小学校4年生である。簡素な分析の結果、家庭の蔵書数と保護者の最終学歴が算数および理科の学力に強く影響を及ぼしていることが示された。家庭の蔵書数が最も少ないグループと最も多いグループの間の平均得点差は、偏差値に換算して、他の要因を統制しない場合で8~9、他の要因を統制した場合で4程度であった。また、得点だけでなく学習意識にも家庭環境の影響が見られ、蔵書数が最も少ないグループと最も多いグループの間には、「算数がとても好き」と分類される割合に12%ポイント程度の差が確認された。さらに、蔵書数が多い家庭の保護者の特徴として、小学校就学前から読書や言語に関連する活動を子どもと数多くおこない、保護者自身も日ごろから読書習慣を持っていることが確認された。

本稿の分析は簡素なものであるが、家庭環境の差による学力差や学習意識の差を直観的に認識する上では有用であろう。とはいえ、児童の学力や学習意識に大きな影響を及ぼしている家庭の蔵書数という変数が何の代理変数なのかという点については、さらなる研究が必要である。

	算数	理科
B. 家庭の蔵書数		
0 - 10 冊	569.4	550.2
11 - 25 冊	585.7	561.8
26 - 100 冊	601.6	575.3
101 - 200 冊	622.8	597.5
201 冊以上	630.5	603.5
その他, 不明等	548.3	528.7



* 本概要の最新版は <http://www.econ.niigata-u.ac.jp/~hojo/> を参照してください。

† 新潟大学経済学部准教授